

# 月とひまわり

tsukitohiwawari

七瀬 佑衣

nanase yui



夏は、いつも向日葵を見ていたような気がする。

香りの強いチョコミントアイスや、たまに夏祭りで食べたかき氷のように、冷たい真夏を意識した時、必ず遠くで向日葵が笑っていた。

庭に咲いた向日葵は、夕焼けを見るたびに何かを言いたげに地面を眺めていた。

夜が近づいた時、星がひとつ微笑んだ。

向日葵は、それに気付くこともなかった。

月が、星たちの間に生まれた。

微笑みは、本当に星たちだけのものだったのだろうか。

月が笑うことはなかった。

月下の雫を乞うように、向日葵を射して雫は零れた。

星たちが笑った。

涙を零したのは、向日葵の悲しみを知らないでいられたから。

夏の暑さに蝉が叫ぶ頃、空を仰ぐ向日葵を見ていた。

溶けかけたアイスと共に、夏はいつもあっという間に過ぎていこうとしている。

「ねえ、この中でどの向日葵が好き？」

アイスを頬張りながら、向日葵を眺めていた仁が尋ねてきた。

夏の暑さにも負けずに、ただチョコミントの味だけで、何だか幸せな気分でいられた。

「どれって、向日葵はどれも同じでしょ？」

仁がアイスの小刻みに振り回しながら、感慨深げに向日葵を眺めていた。

「・・・オレさ、向日葵っていつも夏休みの合間に見る、ただの風物詩だと思ってたんだよね。向日葵になるために、何をすればいいかな・・・」

蝉の鳴き声の中に、あたしたちはいた。

しばらく見る向日葵たちの喧騒が、何だか蝉の鳴き声と同じくして夏を過ごすあたしたちの間にいたような気がする。

「向日葵になりたいの？」

もう一度聞き返すと、アイスを一口食べて仁が笑った。

「空を見るとさ、いつも雲があるでしょ。でも、青い空ばかりじゃないってことは、夜の向日葵はいつも空ばかりを見ているわけにはいかないんじゃないのかなって思って。夜は泣くのかな、向日葵・・・」

向日葵が、風に揺れていた。

アイスは涼しげに、口元を冷やしていく。

「夜の間は、きっと空なんて見てないよ。空を見たいのは、きっと太陽がそこにあるからでしょ。向日葵はきっと夏の間だけ笑うことができるんだよ。あたしは夜の向日葵を見たことがあるよ。空を見てはなかった」

仁が少し興味ありげに微笑んだ。

「へえ・・・泣いてた？」

あたしは頷いた。

仁が笑った。

「夜は照らすものなんてないもんね。・・・寂しいだろうね、夜になると」  
真剣な眼差しで、太陽に照らされた向日葵たちを眺めていた。

仁は、向日葵になりたいと言った。

あたしは、夜の向日葵を見たことがあった。

夜の向日葵を見て、仁は寂しさを感じるのだろうか。

涙は、決して悲しみのもとだけでは生まれない。

ほんの小さな夜の出来事も、本当は月に照らされただけの向日葵の中では、小さな悲しみを抱いただけに過ぎないのかもしれない。

向日葵は、確かに月の雫を受け止めていた。

涙は月を照らすだけの夜を、ただ向日葵の過ごした夜に見た光景でさえも、夏の小さな寂しさの中に埋もれてしまった記憶として、空が青かったことを忘れてしまった夜に、仁を想ったことをただ埋めただけだった。

昨日、向日葵が悲しんでいた。

夜が泣いていた。

月は雫を零した。

星たちは、さんざめく空で笑っていた。

風がなびくと、向日葵は願った。

早く空が青くなれ、と。

夜は寂しい。

「向日葵になりたい」

もう一度、仁がそう言った。

笑った顔を、ずっと眺めていたかった。

夏は、また過ぎていく。

同じ向日葵は咲かない。

仁は、どの向日葵を選んだんだろう。

あたしは、仁の微笑んだ顔を見ながら、向日葵の夏の夢を見ていた。